

フィリピン残留日本人理解のための教材開発

— 残留者のライフヒストリーに着目して —

太 田 満 奈良教育大学社会科教育講座 (社会科教育)

Development of Teaching Materials for Understanding the Japanese Left behind in Philippines:

With a focus on Life History of the Left behind Population

OTA Mitsuru

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

Abstract

The purpose of this paper is to investigate the life history of the Japanese left behind in Philippines, to show the significance of learning them, and to develop teaching materials for understanding them. This paper describes the current situation and the life history of three Japanese who still remain in Philippines, and whose generation are different from each other. The significance of learning their life histories in social studies is "to re-examine the viewpoints of the Pacific War and Post-War Society in the textbook," and "to think about the issue of statelessness," and "to be interested in Philippines and the histories between Japan and Philippines." After thinking about the aims through teaching materials for understanding the left behind population, this paper proposes the learning unit for social studies (history studies) in junior high school.

キーワード：フィリピン残留日本人，教材開発，
ライフヒストリー，無国籍問題，社会科

Key Words : the Japanese left behind in Philippines,
Development of Teaching Materials,
Life History, Issue of Statelessness,
Social Studies

1. はじめに

1.1. フィリピン残留日本人の訴え

2019年10月30日，東京都千代田区にある主婦会館で，認定NPO法人フィリピンリーガルサポートセンター（以下「PNLSC」）主催の「フィリピン残留日本人訪日代表団からの報告シンポジウム」が開かれた。タイトルは，「わたしたちを日本人と認めてください」である。同シンポジウムには，代表団のイネス・マリヤリ，寺岡カルロス（刈呂），岩尾ホセフィナ，木下恵美子（アントニナ・エスコビリヤ）の4人が登壇した（敬称略，表1参照）。イネスが，訪日の趣旨と成果を報告し，寺岡，岩尾，木下は，日本人の父をもつ残留者としての証言を行った。

表1 フィリピン残留日本人代表団のプロフィール

名前	プロフィール
イネス・マリヤリ	・1971年4月20日生まれ ・祖父は鹿児島出身 ・ダバオ州在住 ・フィリピン日系人会連合会会長，フィリピン日系人会〔PNJK〕理事長
寺岡カルロス	・1930年12月25日生まれ ・父は山口出身 ・マニラ首都圏サンファン市在住 ・前フィリピン日系人会連合会前会長
岩尾ホセフィナ	・1937年3月19日生まれ ・父は大分出身 ・パラワン州在住

木下恵美子 (アントニナ エスコビリヤ)	・1940年5月9日生まれ ・父は広島出身 ・ダバオ市在住 ・在ダバオのフィリピン日系人会 〔PNJK〕会長
----------------------------	--

注) PNLSC主催「フィリピン残留日本人訪日代表団からの報告シンポジウム」(2019年10月30日)配布資料, p.1を基に筆者作成

イネスからは、戦前にフィリピンへ渡った日本人を父にもつフィリピン残留日本人が、無国籍状態になっていること、彼らが日本国籍の回復を求めていること、代表団が国会議員らと面会し、一括救済を求めたことなどが述べられた。歴史の証言者として登壇した他の3名は、PNLSC代表理事の河合弘之が聞き手となって、自身の家族関係や体験、願いを語った。

外務省第12次調査(2019年3月公表)によると、残留日本人は、計3,810人いるとされる。その内、生存者(生死不明者含む)は1,723人(45%)、死亡者は2,087人(55%)である。生存者(生死不明者含む)のうち、日本国籍取得済は654人(38%)、無国籍者は1,069人(62%)である⁽¹⁾。

日本人であるのに何等かの事情で戸籍がなかったり、戸籍の所在が不明だったりする日本人が、家庭裁判所の許可審判をもとに、新たに本籍を設定して戸籍を作ること「就籍」というが、フィリピン残留日本人の就籍は、2019年10月現在、申立総件数(延べ)は302件である。その内、許可済は239件、係属中は7件、取り下げは26件、却下30件(15件は再申立で許可)となっている⁽²⁾。

なぜ、フィリピンに、残留日本人がいるのか。どうして、残留日本人が無国籍者になってしまうのか。戦後75年が経ち、日本国籍の回復を求める背景に何があるか。これらの問いは、フィリピン残留に至る経緯や歴史的状況を紐解かなければ、見えてこない問題である。そこでまず、フィリピン残留の経緯を概観し、フィリピン残留日本人を定義する。その上で、フィリピン残留日本人を理解する必要性を述べる。

1.2. フィリピン残留に至る経緯

フィリピン残留を述べる前に、近代以降、日本人がどのようにしてフィリピンに移住するようになったのかの概略を述べる。きっかけは、1903年の「ベンケット移民」(ベンケット道路建設に関わった移民)である。1899年、フィリピンの領有権を確保した米国は、植民地政庁をマニラに置きつつ、ルソン島北部のバギオを避暑地とした。1900年にマニラ北方のダグパンからバギオに至るベンケット道路の建設が始まり、中国人やフィリピン人の他、日本人も建設に携わった。工事終了後、職をなくしたベンケット移民の中には、バギオに移り住んだ者もい

て、戦前には1,000人を超える日本人が住み着いた(河合編2005:12)。だが、それ以上の規模で集住したのが、ミンダナオ島南東部のダバオである。ダバオは、船舶用ロープの材料となるマニラ麻栽培の一大生産地である。そのダバオに日本人移民を促したのが、「ダバオ開拓の父」といわれる太田恭三郎(1876~1917)である。太田は、ベンケット道路工事終了後、ダバオの農場主に、日本人労働者誘致の話をもちかけ、日本人を連れてダバオに渡った。1906年に太田商店を開き、店の経営と共に、移民の福利増進に努め、以後、ダバオ市の各地に支店を出した。また、日本人の農業の発展のために日本人による土地の獲得が不可欠と考え、フィリピンの法律に基づいて太田興業株式会社を設立し、ダバオの開拓と麻産業の発展に重要な役割を果たした。結果、日本人経営の中小会社が多くつくられ、麻栽培に従事する日本人移民が増え、「満洲国」を模して「ダバオ国」と呼ばれるほどの日本人移民社会を形成した。太平洋戦争が始まる前の1939年には、17,888人が居住し、フィリピン全土の在留日本人の61.6%を占めた。その後も人口は増え続け、1943年の初めには19,089人が居住した(大野2008:723-724)。

日本人の定住と共に、現地フィリピン人との結婚も進んだ。1939年のフィリピン政府の調査によると、ダバオで日本人男性と一緒に暮らす日本人妻は3,007人、フィリピン人妻は269人である。日本人男性の20歳以下の子どもの数は、母親が日本人の場合は6,371人、母親がフィリピン人場合は754人である(大野2008:729)。当時の日本の国籍法は父系主義をとり、日本人男性と外国人女性が結婚してできた子は、日本人である。

太平洋戦争が始まると、日本人移民の多くが軍人・軍属として現地で徴用された。日本人父とフィリピン人母の子どもも適齢期になれば徴用された。戦争によって、日本人父と死別したり、生き別れたりした子どもは、戦後の「反日感情」の激しくなったフィリピン社会で、難を逃れるために山奥に逃げ隠れた。そして、日本名をフィリピン名に変え、日本人の子であることを隠して生きた。

1956年に日本とフィリピンは国交を回復し、1960年に友好通商航海条約が結ばれたが、フィリピンの「反日感情」は強く、議会の承認を得られなかった。同条約が批准されたのは、マルコスの戒厳令政権下の1973年のことである。その間もそれ以降も、フィリピン残留日本人の帰国は難しく、出自を隠して生きていたことに加え、戦争中に、書類(戸籍)を紛失したり、戸籍登録がなされていなかったりするなど、出自の確認が非常に困難であった。

戦前のフィリピン憲法(1935年)では、フィリピン人母と外国人父の間に生まれた嫡出子は、成人までに国籍

選択をしない場合、父方の国籍を継承するとされた。戦後のフィリピン憲法（1973年）では、フィリピン国籍も選択できる権利が制定されたが、極度の貧困にあり、情報を得るのに難しい環境にあった残留日本人は、選択して国籍を取得することもできず、日本人でもなく、フィリピン人でもない、不安定な社会的立場に置かれたのである。

高齢化した残留日本人の間で、自らのアイデンティティを確認したい、死ぬ前に一度は日本を訪れたい、日本の親戚に会ってみたいという気持ちの高まりが見られる。たとえ自分は日本に行けなくても、子どもや孫には、日本でよりよい生活を築かせたいという思いもある。様々な感情や思いの中で、残留日本人の国籍回復の動きが続いているのである⁽³⁾。

1.3. フィリピン残留日本人の定義

フィリピン残留日本人とは誰か。簡潔に言えば、太平洋戦争終結までにフィリピンに渡るか、フィリピンで生まれた日本人で、戦争によって父親または両親と離散するなどして、現地に残留せざるを得なかった日本人のことである。

フィリピン残留日本人の概念を考える上で、河合弘之編著『フィリピン日系人の法的・社会的地位向上に向けた政策のあり方に関する研究報告書』（以下「報告書」）は参考になる。同報告書では、フィリピン残留日本人を説明する前に、「フィリピン日系人」という言葉を使う。フィリピン日系人とは、「何世か、国籍、摘出、非摘出、現在の居住地等は問わず、「フィリピンに移住した日本人を頂点とする家系図につらなる人すべて」を指す（河合編2005：1）。

戦前にフィリピンに移住した日本人は、太平洋戦争が起こって以降、軍に召集されたり、現地ゲリラに殺されたり、戦後にアメリカ軍によって送還されたりして、子どもと死別したり、生き別れたりした。その残された子どもを報告書では「日系2世」と呼ぶ。

報告書では、「①本来、日本国籍保持者でありながら、戦争によって異国に残留し、それにより国籍が曖昧になった、②戦後、日本人という理由でいじめや差別に苦しんだ、③その結果、戦後長く、日本人としての自己主張が不可能で、祖国日本に対して声をあげることができなかった」などの側面に注目し、「日系人」というよりも「残留“孤児”が適当ではないか」と述べている。そして、フィリピン日系人のうち日系2世を、「フィリピン残留日本人」ないし「残留2世」と呼び、3世以下の日系人と区別したと述べる。その意図は、「日系人」というと国籍が外国だが血統は日本、というニュアンスがあり、彼ら（2世）の国籍が本来日本であることを忘れられがち」だからである（河合編2005：2）。

報告書では、フィリピン日系2世は、中国残留孤児と「酷似」していると述べる。だが、中国残留孤児の場合、「中国残留2世」とは一般的に言わず、残留者を1世や2世と区分することは稀である。しかし、フィリピン残留の場合、残留の有無に関わらず、現地に渡った日本人を1世として捉え、フィリピン「残留2世」とは、「日系2世」（日本人と外国人との間の子ども）に相当する概念となる。中国やサハリンの事例ではあまり見られない、フィリピン残留固有の表現は、結局のところ、「純血」か「混血」かに拘る思想につながり、他の残留現象との比較に混乱を生じさせるのではないかと。本稿では、「残留2世」という言葉は基本的には使わず、「残留者」や「残留日本人」とし、その子どもは「残留日本人の子ども」と述べる。ただし、本人が「日系」を使う場合はそれを妨げない。

1.4. フィリピン残留日本人理解の必要性

ここでは、フィリピン残留日本人理解の必要性を、国際的な取り組み、戦争・戦後体験の継承、社会科教科書の課題の観点から述べる。

フィリピンの取り組みに関しては、冒頭に紹介したシンポジウムの講演が象徴的である。残留日本人代表団に同行したメルビン・スアレス（当時はフィリピン司法省難民・無国籍者保護課保護官）は、同シンポジウムで「フィリピンと国際社会における無国籍者削減への取り組み」と題する講演を行った。無国籍者とは、「いずれの国家によってもその法の運用において、国民とみなされない者」（無国籍者の地位に関する条約第1条）であり、フィリピンでは、2011年に無国籍者の地位に関する条約に批准するなど、無国籍者を減らそうとする取り組みがなされている。フィリピンにおける無国籍者は、フィリピン南部に住むインドネシア人との子孫や、フィリピン及び東南アジアの海洋先住民族のサマ・バジャウ、フィリピン国内の出生未登録児、日本人移民の子孫などが挙げられる。とりわけ日本人移民の子孫については、無国籍状態におかれていることの解決策をフィリピン政府にだけ委ねてよいかという問題がある。「すべての者は、国籍を取得する権利を有する」（第15条）という世界人権宣言を持ち出すまでもなく、今日では、持続可能な開発目標（SDGs）において、2030年までに全ての人々に出生登録を含む法的な身分証明を提供することが言われている。このような国際的取り組みの中で、日本に住む我々が、フィリピン残留日本人の無国籍問題をどう受け止めるかが問われている。

次に、戦争・戦後体験の継承という点では、戦後75年が経過し、戦争体験の風化が危惧されている。とりわけ移民の戦争・戦後体験は、あまり知られていないように思われる。社会科教科書に記されている満州移民とて、

その体験を知る若い世代は多くないだろう。フィリピンでの戦争体験については、日本軍兵士の事例は知られても、日本人移民やフィリピン人の戦争体験となると、知らない人が多いのではないか。ましてや、フィリピンからの引揚体験やフィリピン残留日本人の戦後体験は言うまでもない。飯島（2013：691）は、「日本帝国崩壊に伴う太平洋戦争の地理的・空間的な認識の『空白』がある」と指摘するが、国民国家の枠組みでのみ、戦争・戦後体験の継承が行われれば、「空白」はさらに強固なものになるだろう。

戦争・戦後体験継承の場の一つに学校があるが、児童・生徒が手にする社会科教科書には、フィリピン残留日本人は取り上げられていない。全国的に採択率の高い東京書籍を例に挙げれば、小学校の社会科教科書（6年上、2014年検定済）においては、「中国残留孤児となった人々」と題する写真が掲載され、「満州に移住した人々の中には、日本に帰れず中国に残された人が多くいました。今でも肉親探しが続けられています」と記されている。中学校の社会科教科書（歴史的分野、2015年検定済）では、本文に「敗戦後、植民地や占領地にいた軍人と民間人が、日本にもどってきました。しかし、復員や引きあげは順調には進まず、シベリア抑留や中国残留日本人孤児などの問題が発生しました」と記される。

フィリピン残留日本人は、中学校の社会科教科書にある、「中国残留日本人孤児などの問題」の中の「など」に含み込まれている。フィリピン残留には中国残留とは異なる特質がある。一つは、国策ではなく個人の意思で渡ったと見なされ、残留者の一時帰国など国による支援がなく、救済の対象外になっていることである。二つは、無国籍問題である。国籍の喪失については、同上の中学校社会科教科書（歴史的分野）に、先の文章の続きとして「日本からは、多くの朝鮮人や中国人が帰国しました。その一方で、後に日本国籍を失いながらも、帰国先の混乱などの理由から日本にとどまった朝鮮の人々も数多くいました」と記されている。戦後に国籍を失ったのは、朝鮮人や中国人だけではなく日本人も同様である。それは、国境の変動と戦後の混乱によって民族を問わずに起こり得る事象である。

2. 研究の枠組み

2.1. 先行研究の検討

日本の社会科教育研究の場合、フィリピン残留日本人を取り上げた実践研究は管見の限り見られない。教科・領域を横断して取り組まれる国際理解教育研究においても同様である。国際理解教育の文脈で、日系移民学習を論じたものに、森茂・中山編（2008）がある。日系移民学習の理論と方法を包括的に論じた先駆的研究である

が、教材開発がなされたのは、ハワイや南北アメリカ地域に留まる。

大津編（2014）には、日本国際理解教育学会の科研プロジェクト活動として進められた、日・韓・中の共同開発研究の成果がまとめられ、その中に「人の移動」（移民）をテーマとする実践研究が記されている。その参加者である、森茂・中山（2014）は、グローバル社会・多文化社会を生きる上で必要とされる価値として「人権、公正／正義、多様性、共生」を設定し、それらの価値を学ぶための具体的な学習内容（キーコンセプト）例と大単元「人の移動」の内容構成を示した。日韓の学校で授業実践を行い、グローバルヒストリーとしての移民学習を展開した点に大きな価値がある。しかしながら太田（2019a）は、上述の大単元「人の移動」の内容構成は、「移動した／する人」を中心とするもので、「移動できなかった／できない／しない人」にも着目すべきだと論じ、サハリン残留・帰国者を事例とする教材開発を行った。また太田（2019b）は、当事者の残留・帰国体験を位置づけた「中国・サハリン残留日本人学習」の意義と方法を示したが、太田による一連の研究は、残留日本人が抱える無国籍問題を視野に入れたものになっていない。

フィリピン残留日本人の生活体験をどのように継承すべきだろうか。参考になるのが蘭らの歴史実践である。蘭（2013：158-161）は、満蒙開拓や中国残留体験を継承する、長野県飯田市の「満蒙開拓を語りつくす会」を事例に、語りつぎの機能や意義を記している。第一に「語りの場」を設けることで、公的に語られることへの道を開いたこと、第二に、当事者の生活体験を「私的な体験」ではなく「公的な体験」と捉え、個別から普遍を見ようとしたこと、第三に、当事者の人生そのものを取り上げ、現代社会との関連を問うていること、第四に満洲開拓や中国残留に関する議論が本格的に始まったことである。蘭の議論から、まずは残留体験を継承する場（機会）を設け、個の人生から歴史や現代社会を考え、残留問題の議論を始めるきっかけ作りが重要であるが見えてくる。残留体験を継承できる場の一つに学校があるが、藤井（2018：181）は、オーラルヒストリーを用いた（人々の生活を聞き取り、史料として活用しながら歴史を探究する）授業について、その学習効果の高さを述べている⁽⁴⁾。

フィリピン残留日本人の生活体験を書き起こした記録として、先述の報告書（河合編2005）がある。だが、報告書の記録は、15年以上前に調査されたもので、戦後75年が経過した現状を把握したものではない。残留日本人の現状を捉えつつ、世代の異なる残留日本人のライフヒストリーを記述し、教材化することが求められる。

2.2. 本研究の目的と方法

本研究の目的は、世代の異なるフィリピン残留日本人のライフヒストリーを記述し、フィリピン残留日本人のライフヒストリーを取り上げた学習（以下「フィリピン残留日本人学習」）の意義やねらいを明らかにして、フィリピン残留日本人理解のための教材開発を行うことである。

研究方法としては、まず、フィリピン残留日本人に聞き取り調査を行う。筆者はまず、日本人移民が最も多く住んだダバオに着目し、フィリピン日系人会ダバオに協力を依頼をした。すると、以下3名がインタビューに応じ、論文として公開することを承諾してくれた。アカボシ ハツエさん（フィリピン名は、アヤップ・ハッチ）、カトウ マサオさん（フィリピン名はマルセロ アグアン）、イネス・山之内・P・マリヤリさんである。ハツエさんとマサオさんは残留日本人で、イネスさんは、残留日本人の子どもである（表2参照）。戦後直後を成人期として過ごしたハツエさん、戦後直後を幼年・少年時代として過ごしたマサオさん、戦後25年が過ぎて生まれたイネスさん、を取り上げることで、三者が生まれ育ったダバオを中心とする戦後社会の変遷が見えてくるだろう。

表2 インタビュー協力者

名前（敬称略）	生まれた年・場所	性別
アカボシ ハツエ （アヤップ ハッチ）	1926年・トリル	女
カトウ マサオ （マルセロ アグアン）	1943年・タモガン	男
イネス・山之内 P・マリヤリ	1971年・カリナン	女

まず、ハツエさん、マサオさん、イネスさんの順に三者から聞き取った内容を記述する（第3章）。その際、小・中学校の授業での教材化を見据え、児童・生徒が読んで理解しやすいように一人称の語り口で記述する⁽⁵⁾。次に、残留日本人のライフヒストリーを学ぶ意義や社会科でそれを学ぶ意義を明らかにし、フィリピン残留日本人学習のねらいを整理する。その上で、中学校社会科（歴史的分野）を想定した授業構想を提言する（第4章）。

3. フィリピン残留日本人のライフヒストリー

3.1. アカボシ ハツエさんの場合

筆者がハツエさんと出会ったのは、ハツエさんが93歳の時である。2019年11月25日、ハツエさんの娘の自宅で聞き取りをした。自宅はダバオの旧市街地から車で1時間ほど走ったところであり、さらに車が通れない未舗装の小道を10分ほど歩いたところにある（写真1参照）。

ハツエさんは日本語でのコミュニケーションは可能と

思われたが、念のために、通訳を用意して、どの言語でも対応できるようにした。ハツエさんの場合、ビサヤ語やバゴボ語を話す。そこで、筆者は、2人の通訳を立て、「筆者（日本語）⇔ 通訳A（英語）⇔ 通訳B（ビサヤ語）」という形で聞き取りをした。また、場合によっては、3人の通訳を立て、「筆者（日本語）⇔ 通訳A（英語）⇔ 通訳B（ビサヤ語）⇔ 通訳C（バゴボ語）」という形を取った。

結論を先取りすれば、ハツエさんの語った内容は非常に少なかった。後述するように、筆者が訪問した当時は、住み慣れた家を離れ、娘の家に住んでいた。娘の話では、彼女は大変高齢で、不便な環境に住んでいたため、自宅に呼んで一緒に暮らし始めたが、慣れない環境に加え、親しい妹とも離れることになり、食事もほとんどしなくなったという⁽⁶⁾。教材化を考えた時、ハツエさんが語ったことから、残留日本人の理解は難しい。そこでまず、残留日本人の現状を伝えることを念頭に、ハツエさんの様子を記述する。



写真1 ハツエさんが住む場所に至る小道の景色
（2019年11月25日 筆者撮影）

(1) ハツエさんの様子

ダバオの旧市街地から車で1時間ほど離れ、さらに舗装されていない道を10分ほど歩いたところに、アカボシ ハツエさんという残留日本人がいます。ハツエさんは2019年11月現在、93歳です。

ハツエさんは、最近、カリナン地区にある娘さんの家に引っ越してきました。ハツエさんが以前に住んでいたシブラン地区の家には水がなく、バイクに乗って水を汲みにいかなければいけませんでした。心配した娘さんが、カリナン地区の自宅に呼んだのです。娘さんの自宅のリビングの一角に、ハツエさんのベットがあり、生活していました。「こんにちは」と声をかけると、細い声で「こんにちは」と返してくれた。こちらから自己紹介すると「わたしはアカボシハツエです」と細い声で返してくれました。

日本語で答えられたのは、ここまででした。そこで、英語や現地の言葉が分かる通訳の人に入ってもらって、質問を始めました。けれども、ハツエさんは、うわの空でした。次第に現地の言葉で、「わからない」と答えるようになりました。どうしたものかと戸惑っていると、娘さんが次のように話してくれました。最近、シブラン地区からカリナン地区に移り住んだこと、先週はハツエさんの誕生日で、お祝いにたくさんの親戚が集まったけれども、みんな帰ってしまい寂しくなったこと、特に、シブラン地区に住む親しい妹に会いたがっていること、ここ数日、食欲を失っていること、などです。現地の言葉のできる通訳の方も、その年の7月に会った時は、ハツエさんはとても元気で、ずっと笑顔だったことを話しました。けれども、その時は、ハツエさんはまだ、シブラン地区に住んでいました。

うわの空だったハツエさんに、通訳の方が、現地の言葉で、耳元でささやきます。「日本に行きましようか」。すると、ハツエさんは、大きく目を見開き、「いつなの?」「いつ日本に行くの?」と答えました。どんなに、うわの空であっても、日本に行くということには強い関心があるようでした。そして、元気を取り戻したかのようでした。それからは、少しずつ質問に答えてくれるようになりました。ハツエさんは、現地の言葉であるピサヤ語やバゴボ語を話します。日本語、英語、ピサヤ語、バゴボ語を使いながら、ハツエさんに尋ねました。ハツエさんは、お父さんが熊本県出身であること、お父さんがとてもかわいがってくれたこと、日本の小学校に1年間通っていたこと、当時の先生は怖かったこと、日本の歌を今も覚えていることなどを話してくれました。ハツエさんは、日本の歌を歌ってくれました。「鳩ぼっぼ」です。歌い終わった後、娘さんが、「君が代も歌えるよね」と促しましたが、「鳩ぼっぼ」以外は歌いませんでした。

ハツエさんは、しばらくすると、再びうわの空になりました。ハツエさんは疲れた様子にも見えませんでした。それで、こちらからの質問はやめることにしました。帰り支度をしようとする、ハツエさんの娘さんが、「どうぞ食べて行って下さい」と食事を用意してくれました。ハツエさんに「一緒に食べましよう」と声をかけましたが、現地の言葉で「いらぬ」と断られました。しばらくすると、ハツエさんは、日本語で「食べていって」と言いました。ハツエさんも、ベッドの上でコーヒーとビスケットをほんの少し食べ始めました。

帰り際、ハツエさんに「今日はありがとうございました」と話しかけて握手をすると、ハツエさんの細くて小さな手は、ずっと握り返したままでした。

ハツエさんは、映画『日本人の忘れもの フィリピンと

中国の残留邦人』(2020年7月公開)にも登場する。かつてハツエさんが住んでいたシブラン地区での撮影である。その映画では、ハツエさんは日本語で語り、自分の名前をカタカナで書く場面も見られる。しかし、筆者が聞き取り調査をした時は、うわの空で元気がなく、一言、二言の日本語が出てくる程度であった。そうであっても、「日本に行きましようか」の一言には、大きな反応を示した。残留日本人にとって「日本」がどのような存在なのかを考えさせられる場面である。ハツエさんにとって、日本は足を踏み入れたことのない望郷の地である。

ハツエさんが15歳の時に、太平洋戦争が始まっている。開戦に伴い、アメリカ軍やフィリピンの警察によって、フィリピン在留の日本人は各地で強制収容されている。1941年12月20日に日本軍がダバオに上陸して日本人は順次救出・解放されるまで、多数の日本人が殺されたり、自宅や商店が荒らされたりした。当時15歳前後のハツエさんの生活体験の聞き取りを期待したが、それは叶わなかった。

後述のイネスさんは、フィリピン日系人会連合会会長を務める。フィリピン全土を回りながら、聞き取り調査を行っているという。イネスさんによると、2019年の時点で一番心配しているのは、本人たちの記憶が薄れていくことだと言う⁽⁷⁾。10年前なら「大昔の話だから忘れまし」というような回答はほとんどなかったが、今は違うと話す。突然病気になる、亡くなってしまう人もいる。ハツエさんのように、高齢による生活環境の変化から何も語らなくなってしまう例もある。イネスさんは、「今は、時間との競争」と話しているが、ハツエさんの場合、上述の映画と今回との聞き取りを比べれば、残留者への聞き取りが「時間との闘い」であることが再認識できる。

なお、以下は、PNLSCが教えてくれた、ハツエさんのライフヒストリーである。

(2) ハツエさんのライフヒストリー

アカボシ ハツエさんは1926年に生まれです。ハツエさんのお父さんは、熊本県出身の日本人で、名前をアカボシ ミノルといいます。お母さんはフィリピンに住むバゴボ族の人です。お父さんとお母さんの間に、二人の子どもが生まれました。それがハツエさんと妹です。

ハツエさんのお父さんは、アカバ(マニラ麻)の仕事をしていましたが、体力がいるということで、雑貨店を始めたそうです。当時、ハツエさんたちが住んでいたシブランには、たくさんのバゴボ族や日本人が住んでいて、色々な人が買い物に来たそうです。

家では、お父さんと日本語で話をしていました。お

父さんが日本語を教えましたし、ハツエさんたちが日本語を話さないとお父さんは叱ったそうです。

お父さんはハツエさんをハツエと呼んでいました。しかし、お母さんは「ハッチ」と呼んでいました。それが戦後のハツエさんの名前になりました。ハツエさんのフィリピン名は、アヤップ ハッチです。

ハツエさんは、カディガン日本人小学校に通っていましたが、戦争のために1年で通えなくなりました。1942年頃、お父さんは日本軍に参加しました。戦争が激しくなると、ハツエさんと母と妹は、山の方へ逃げました。その時に、近所に住むバゴボ族のアトス家の人たちが助けてくれました。お父さんは、日本軍として働いていたのでシブランの家にはいました。別れる時、「一生懸命、毎日働いて。食べ物がなかったら、みんな死ぬ。一生懸命だ」と言い残しました。

戦争が終わり、ハツエさん家族は、シブラン地区に戻りました。山の中で一緒に避難生活をしてきたアトス家の人たちは、その後もハツエさんたちをかくまうなどして、助けてくれました。のちに、ハツエさんはアトス家の人と結婚しました。それは、お父さんのお店に来ていた人で、お父さんを知っている人でした。

ハツエさんは、夫との間に8人の子どもができました。夫とトウモロコシや米を育てて生活をしました。

戦争が終わって15年ほどがたつと、ハツエさんのお母さんは病気で亡くなりました。お母さんは戦後、再婚することはありませんでした。お母さんはお父さんのことが大好きだったそうです。

ずっと、日本のお父さんの親族からも連絡はありませんでした。ハツエさんは、お父さんと別れてから、ずっとお父さんと会いたいと思っていました。けれども、連絡の取り方が分かりませんでした。1990年頃、ハツエさんは日系人会のことを聞き、お父さんのその後が聞けるかと思って、訪ねました。

ハツエさんは戦争のせいですと苦労してきたと話します。ハツエさんは、自分のことを日本人だと思っています。日本人として認められたら、ぜひ日本のお父さんの故郷を訪れたいと思っています。

ダバオ地域の土地の多くは、元来バゴボ族が所有しており、ハツエさんの父は、地元住民であるバゴボ族の女性と結婚をした。その二人の間に生まれたのがハツエさんである。

ハツエさんは日本人小学校にも通っていたという。ダバオには、1924年に日本人小学校ができてから、1937年までに私立を含めて12の日本人小学校がつくられた。ハツエさんはそのうちの「カディガン日本人尋常小学校」に通った。教育課程は、日本国内と同様に皇国精神などが教えられ、在籍者は日本人として育成されたといわれ

る（河合編2005：23-24）。

ハツエさんの父は、1942年頃に日本軍に入ったという。この頃に入隊したかは分からないが、太平洋戦争が始まり、強制収容された在留日本人を日本軍が救出して以降、現地日本人会は、自分たちを解放してくれた日本軍に協力した。食料確保、自警、交通整備などを行い、軍から銃の貸与を受けて、治安の確立にもあたった。自警団はのちに義勇隊と改名され、偵察やフィリピン人の宣撫工作などにもあたった。1945年になると、日本人移民男性は現地召集される。1945年4月、米軍がダバオ西方に上陸し、5月にはダバオ市への総攻撃が始まった。日本軍と一緒に戦った日本人移民の男性は5,027人にのぼり、そのうち生き残ったのは347人である（飯島2013：701）。ハツエさんの父は生き残り、日本に強制送還された後、フィリピンに戻らなかった。

ハツエさんは、「日本人として認められたら、ぜひ日本のお父さんの故郷を訪れたいと思っています」と述べている。ハツエさんは2013年1月に、妹共に日本の就籍許可が認められた。ハツエさんはその後も日本を訪れたことはないが、ハツエさんの子どもが日本に渡っている。

3.2. カトウ マサオさんの場合

筆者がマサオさんと出会ったのは、マサオさんが76歳の時である。2019年11月24日、ダバオ市にあるダバオ日系人会会議室で聞き取りをした。マサオさんは日本語でコミュニケーションをすることが難しいため、通訳を介して聞き取りをした。マサオさんの場合、ビサヤ語が話しやすい。そこで、筆者は、2人の通訳を立て、「筆者（日本語）⇔ 通訳A（英語）⇔ 通訳B（ビサヤ語）」という形で聞き取りをした。

聞き取った内容は（1）父と別れて、（2）学校生活、（3）母が教えてくれた日本の歌、（4）母なき後の暮らし、（5）日本に行くという夢、の項目ごとに整理して記述する。

（1）父と別れて

私は、1943年に、ダバオ市のタモガンで生まれました。私が生まれた場所は、山の中です。日本人である父が出て行った後、身の危険を感じた母は、フィリピン人でバゴボ族の母とその親戚と一緒に、山の中に逃げ込みました。私はその山の中で生まれました。

父の名は、加藤たくじと言います。福島県出身で、母との間に二人の子どもが生まれました。それが姉（1941年生まれ）と私です。父が出て行く前は、大工やマニラ麻栽培をしてお金を稼いでいたと聞いています。母は山に隠れるまでは、主婦をしていました。

山では、一日一食で過ごしていました。ラタンという木の葉っぱで、簡単なシェルターをつくって過ごし

ていました。そのシェルターには、母、姉、私と叔父さんと叔母さんの5人が住んでいました。その周りには、母の親戚がいましたが、日本人はいませんでした。

父のことは覚えていません。当時、私はまだ2歳でした。終戦後、日本人が収容所に入れられていることを聞いて、母は父のいる収容所に会いにいったことがあるそうです。父が何かメッセージを残していったということもありません。母によると、日本の親戚が、私たち家族を探しに来ると話していましたが、連絡はありませんでした。

戦争が終わり、平和になってから、自宅に戻りました。父のいない生活は、大変でした。母は、頼る人も食べるものもなくなったので、親戚に頼りました。そして、コーヒーやとうもろこしを作るプランテーションで働き始めました。当時、私たちは竹でできた家で住んでいましたが、私たち姉弟は、その竹の家で、母の帰りを待っていました。食べるものはほとんどなく、芋ばかり食べていました。

マサオさんはタモガンの山の中で生まれたこと、母と親戚がタモガンの山へ逃げたことが語られている。タモガンは、1945年4月、日本軍が在留日本人に、タモガン山中の奥地に避難するよう命じたところである。タモガン奥地のジャングルに、陸軍部隊と在留日本人がなだれ込み、逃避行生活が長くなるにつれ、米軍の砲撃、病気、栄養失調、飢餓による死亡者が増加した。1945年6月から9月のタモガン山中での邦人死者は4千とも5千ともいわれる（河合編2005：30）。そのような日本人集団とは距離をおいて、マサオさんたちは親族と共に山の中で過ごしていた。

マサオさんの「母は父のいる収容所に会いにいった」とある。収容所は劣悪な環境で、栄養失調などで死亡した人は少なくない。収容所内の日本人は送還されることになっていて、処遇は次の通りとされた（河合編2005：31）。

- ①日本人移民および日本人を両親とする子どもたちは全員強制送還
- ②フィリピン人を母とする15歳以上の男子は父親と共に強制送還
- ③フィリピン人を母とする15歳以上の女子は日本に行くこともフィリピンに残ることも選択可
- ④フィリピン人を母とする15歳未満の子は全員フィリピンに残る（日本人父が連れて帰る場合は別）

しかしながら、「現実には15歳以上でも現地に居残り、14歳以下でも日本に送還されたケースは多数ある。日本人とフィリピン人の間の『グレーゾーン』に位置づいた彼らについては、米軍は厳格な引揚げ方針を持っていなかったか、あるいは持っていたとしてもそれを厳密には

実行しなかった」（大野：2008）という。

マサオさんと母と姉は、結局のところ、上の④となった。日本人父が連れて帰ることはなく残留に至った。当時の米軍の聞き取りによれば、「妻たちが現地残留を選択した理由は、①米軍の爆撃で荒廃し、冬が寒冷の日本で多くの子供を抱えて生きる自信がなかった、②日本人の夫も生活への不安などから「引揚げ」に反対した、③別離を望まない、妻の親族の反対、④ダバオの土地、家屋など財産へのこだわり」（大野2008：748）といわれる。マサオさんの母がどのような理由で残留を選択したのかは分からない。日本人の引揚げは、1945年10月に始まり、同年12月に完了した。約9,100人が日本に送還されたが、フィリピン人母とその子どもがフィリピンに残されたケースが圧倒的に多い。

筆者はマサオさんに、父母姉との家族4人で暮らしていた時の思い出を尋ねると、自分が家でマサオと呼ばれていたことの記憶と重なり、「感情的になってしまった」と言って涙をぬぐい始めた。しばらくして「私は当時2歳で、父との思い出はありません」と答えている。

(2) 学校生活

家の中や学校、そして近所の人たちから、私は、マサオと呼ばれていましたが、学校ではマルセロという名前を登録しました。母がそのようにしたのですが、日本人と分かると殺される危険性があったからです。現に私は何度も怖い目に遭っています。フィリピン人ゲリラが日本人を探して、殺そうとしていました。逃げたり隠れたりして、身を守りました。追いかけて、もう少しで殺されそうになったこともありました。

学校では、日本人の子どもだといわれ、いじめられました。日本は悪いことをした、日本人はフィリピン人を殺したとあって、いじめられました。クラスに日本人は私一人だけでした。教室で、お前なんか殺してやると言われたこともありましたが、先生が、そんなことをしたら、お前が牢屋に入るんだとってくれました。

学校生活で悲しかったことは、食べるものもお金もなかったことです。逆に、うれしかったことは、食べるものがあつた時です。私は、山を登りながら、15キロを歩きながら学校に通っていました。毎日、同じシャツに同じズボン、はだしで学校に通います。もちろんカバンなんかありません。当時のほとんどの子どもは同じような状況でした。

残留者が二つ以上の名前をもつことは、中国、サハリンでも同様である。マサオさんは、生き延びるために、名前を変えて登録し、生活を送ってきた。残留当時の日本人は「ハボン」（日本人）とからかわれ、肩身を狭くして生きてきたが、マサオさんは、食べ物がないという生活

苦に加え、「ハボン」であることと向き合いながら生きた。

(3) 母が教えてくれた日本の歌

母は姉と私に日本の歌を一曲ずつ教えてくれました。私に教えてくれたのはこんな歌です。

肩を並べて姉さんと 今日を送り出そう
兵隊さんよ ありがとうね
お国のために お国のために
今日も兵隊さんよ ありがとう

そして、姉に教えた歌は「みよ東海の空開けて」から始まる歌です。母は、私と姉に、それぞれ異なる歌を教えてくれました。歌詞の意味は分かりませんが、夕食後、そこに座りなさいと母がいい、何度も歌って教えてくれました。母は、読み書きはできませんでしたが、日本語は話せました。また、母は、お父さんがいないからと、私たちを躰けてくれました。そんな母も1957年、ぜんそくで亡くなりました。母が亡くなる前、行いをよくしなさい、親戚を敬いなさいと私たちに言い残しました。母が亡くなった後、私たちは、伯父さん（母の兄）のところで過ごしました。伯父さんの家で過ごせるようにと、母が話をつけてくれていました。

残留日本人が当時の日本の歌を覚えているということは珍しいことではない。マサオさんの母が、日本の歌を知っているのは、当時のラジオ放送が一因と考えられる。当時は、日本軍の占領作戦として放送が重視され、「日本語で歌おう」などの番組を通して、日本の音楽が頻繁に流されるようになっていた（寺見2001：262）。

マサオさんは、聞き取り中に、実際に歌って見せた。けれども、母が教えてくれた歌詞の意味は分からない。日本の兵隊さんへの感謝の歌だと知ると、首を横に振った。「意味を知ってどう思いましたか」と尋ねると、「まあ、いいよ」「私は今、生きてますから」と答えている。母が姉に教えた歌については、「みよ東海の空開けて」の後は覚えていない。

(4) 母なき後の暮らし

母が亡くなってからは、学校に通えなくなりました。コーヒーのプランテーションで草を刈る仕事をしました。日給は1ペソにもならない、75センダボスでした。周りから私は日本人だと知られていましたが、そこは母方の親戚がオーナーだったので、いじめられることはありませんでした。1959年までそこで働きました。その後、1962年まで、カラバウという牛を使って、土を耕す仕事をしました。同じ上司からその仕事をするように言われました。1964年から1965年までは、姉夫婦と一緒に住み、姉の夫の田畑で働きました。

1966年、妻と教会で出会い、翌年、私は結婚をしました。その時に、姉夫婦の家を出て、新しい場所で生活を始めました。そこからは、妻がもっていた土地を耕し、米やあらゆる穀物をつくって生計を立てました。1980年からは、宣教師になるための学校に通うことにしました。1983年に卒業してから今日まで、宣教師として活動しています。教会はありませんが、個人宅を訪れて、活動をしています。

私たち夫婦には5人の子どもがいます。私の子どもたちも、学校で、いじめられました。「ハボン（日本人）」、「ハボン（日本人）」といわれましたが、子どもたちは、立ち向かっていきました。かつて日本人は、戦争によって、たくさんビサヤ人を殺したので、周りのビサヤ人からは、日本人は価値がない、尊厳なんかいらぬと言われていたのです。

私たちの家では、バゴボ語を使って暮らしていました。母もバゴボ族、妻もバゴボ族だったからです。私はバゴボ族と日本人の両方のアイデンティティをもっています。戦争中、バゴボ族にかくまわれて、私は生き延びることができました。バゴボ族である母の親戚が守ってくれたおかげで、私も姉も生き続けることができたのです。

母を亡くしたことで、学校に通うことを断念し、働いてお金を稼いだマサオさんは、バゴボ族の女性と結婚する。マサオさんの子どももまた、「ハボン」と向き合いながら生きてきた。最初の子供は1968年に、最後の子供は、1981年に生まれている。この当時もまだ、子ども社会の中でも、「反日感情」の継続が窺える。

父の記憶がなく、戦後を幼少・少年期で過ごしたマサオさんは、時に自分の命を危険に追いやった「ハボン」と自分の命を守ってくれた「バゴボ」の二つのアイデンティティを持ちながら生きてきたのである。

(5) 日本に行くという夢

私の4人の子どもたちは、現在、日本で暮らしています。そのきっかけは、私の友人の一言です。日本人の血を引いているから、日系人会に行けばいいと言われたのが2001年。日系人会に相談し、2005年には、日本の戸籍をとることができました。戸籍がとれたと同時に、父がすでに亡くなっていることを知りました。

私が日本の戸籍をとってから、子どもたちは日本に行けるようになりました。よりよい暮らしのために、子どもたちは日本で働いています。私には今、仕事はないので、子どもたちが仕送りをして、私たち夫婦の暮らしを支えてくれています。もし私も日本に行けるなら、私も働いて暮らしたいです。というのは冗談で、

私はすでに歳をとってしまいました。今度の3月3日で私は77歳になります。若い頃は、日本に行ってみたかった、父や父の親戚に会ってみたかったです。父方の親戚は6人いると聞いています。会えるなら会ってみたいです。

両親がいない生活は本当に大変です。お父さんは私が小さい時に去ってしまったので、その後の暮らしは大変でした。日本政府にお願いしたいことですか。一度でいいから日本に行きたい。日本に行くことが私の夢です。

マサオさんは就籍許可が下りた残留日本人の一人である。日本の戸籍がとれたことで、マサオさんの子どもは、日本に移住することができた。とすれば、マサオさんも日本に行けるはずである。マサオさんは日本への永住は考えていないが、日本への一時帰国は望んでいる。日系人会の職員によると、マサオさんは、日本に永住するのであれば問題はないが、逆にフィリピンで生活が難しくなるという。就籍許可が下りたマサオさんは現在、法的には日本人である。従って、フィリピン政府が厳しく取り締まることになれば、マサオさんは不法滞在となる。マサオさんは住んだこともない日本を選ぶか、住み慣れたフィリピンを選ぶかの選択しかないのである。

3.3. イネス・山之内・P・マリヤリさんの場合

筆者がイネスさんと出会ったのは、本論冒頭のシンポジウムの時である。そこで初めて出会い挨拶を交わし、2019年11月24日に再会した。当日はミンダナオ国際大学の学長室で聞き取りを行った。イネスさんは、日本語でのコミュニケーションが十分にできるため、通訳を介していない。イネスさんは、2019年現在、ミンダナオ大学学長、フィリピン日系人会国際学校学校長、フィリピン日系人会連合会会長、フィリピン日系人会ダバオ理事長を務めている。イネスさんはフィリピンの大学を卒業し、日本への留学経験もあり、自分のことや家族の歴史、フィリピン日系人の状況を日本語で詳細に語ることができる。イネスさんから聞き取った内容は、(1)私の家族、(2)学校生活、(3)日系人として生きる、(4)私の役割と日本社会への期待、の項目ごとに整理して記述する。

(1) 私の家族

私の祖父は日本人、祖母はフィリピン人です。祖父は鹿児島県出身で、祖母はボホール島出身。祖父母の間に、3人の子どもが生まれました。長女のひさこ、次女のみちこ、長男のたつおです。ひさこは私の母です。母は、セブ島出身の男性と結婚しました。のちの私の父です。父は1933年生まれで、母は1936年生まれ

です。父と母との間に10人の子どもが生まれました。その6番目の子どもが私で、1971年に生まれました。

私の家は、大変貧しい家でした。働いていたのは父だけで、母は主婦をしていました。父は会社に勤め、車の運転手をしていました。私の兄弟たちは、大きくなると、アルバイトをして稼ぎました。

私は小さい頃、祖母が日本語を話せるなんて思いもしませんでした。また、日本人の父をもつ母は、ある時期までは、日本のことは一切話ませんでした。家庭では日本語は一切使わず、ビサヤ語か英語を話しました。

私が小さかった頃の70年代は、近所の人たちの間にも、まだまだ「反日感情」がありました。その時は年配のおばあさんたちから、日本軍が当時どれだけ悪いことをしたかということを知られました。日本人といえば、悪い日本軍をイメージしています。私の住んでいた村は、近所付き合いが深く、おばあさんたちが洗濯などで一緒に集まれば、どうしても戦争の話になりました。私たちが日系人であることを知っていたかどうかは分かりませんが、戦争中の日本人が常に話題になりました。日系人はその場にいると何もいえなくなります。私も祖父が日本人なので、何も言えませんでした。

しかし、祖父がフィリピンに渡ってきたのは、兵隊としてではありません。お金を稼ぐためでした。ダバオ南部のカリナン地区に住み、饅頭を売って稼いでいました。戦前のダバオに住む日本人の暮らしはぜいたくで、家の中に、お手伝いさんがいたほどです。母も当時は裕福だったと話しています。

戦争が激しくなり、状況が緊迫してくると、家族はボホール島に移ることにしました。というのも、ダバオには、当時日本人がたくさんいたため、日本人のいないところに移った方が安全だと考えたからです。ボホール島は、祖母の親戚も住んでいます。祖父は、セブ島経由で日本の様子を見に行くといい、私たちの元を離れました。後に分かったことですが、祖父が乗っていた船はアメリカ軍の攻撃にあい、祖父は、その時に亡くなりました。祖父が亡くなった知らせは、70年代に日本の親戚からももらった手紙で分かりました。戦後になって、父はどこにいるのか、手紙を出して探していたところ、親戚からの手紙で分かりました。

話を戻しますと、祖母や母たちがいたボホール島も安全な場所ではありませんでした。戦闘が起きていたので、山の奥に逃げ込んで生活をしなければなりません。山の奥には食べ物がなく、母たちは栄養失調になり、命をつなぐことで精一杯でした。戦争が終わり、ダバオに戻れば、元の生活ができると思っていました

が、戻った時には、土地や財産は全て奪われてしまっていました。無一文になった祖母や母たちは、住む場所を失い、やがて田舎に移り、知り合いの農園で働き始めました。

祖母はしばらくしてから、生きて行くため、自分の子どもを育てていくために、現地のフィリピン人と再婚しました。それでも貧しい暮らしは続きました。母の話では、母が小学生だった頃、農園を手伝い、野菜を売りに出かけたり、家事をしたりするのに忙しく、働きながら勉強していたといいます。母は小学校を卒業してから学校に通うことなく、働き続けました。

戦後、母の名前から、祖父の姓である「山之内」はなくなりました。祖母がもつフィリピン名の「パルガン」を名乗りました。日本人であることを隠す必要があったからです。母は、仕事でダバオに来ていた父と出会い、1955年に結婚します。父の家族は、ほとんどがセブ島にいましたから、結婚に反対する人はいませんでした。もし父の家族がダバオに住んでいたら、日系人との結婚ということで、父の家族の中にも反対する人はいたかもしれません。

戦後、イネスさんの母の名前から、「山之内」姓がなくなったこと、イネスさん自身、祖母が日本語を話せたことを知らなかったことなど、家族の中にある「日本」が消し去られた様子が語られている。戦前は裕福だった家庭が戦争を機に山中での暮らしを余儀なくされ、敗戦後は貧困に陥った。戦後の「反日感情」の激しいフィリピン社会で、祖母は生きるためにフィリピン人と結婚し、家族は日系人であることを隠して生きてきた様子が窺える。

(2) 学校生活

私が小学校2、3年生の頃、日本人の名前をもち、日本人の顔をしていた同級生がいました。教室に入ってくると、「日本人がやってくるから隠れろ」という子がいました。同級生は毎日のように、けんかをしていました。私は一目見て日本人と分かる顔ではなかったので、ずっとだまっていました。みんなから、からかわれたくないと思っていましたし、からかわれたら、学校に行けなくなるとしていました。

小学校の高学年になると、歴史の学習が始まります。第二次世界大戦の学習では、「私たちを守ってくれたのはアメリカ軍とフィリピン人ゲリラ」であり、「敵は日本人」だと習いました。教科書には、日本人は悪いことしか書かれていませんでした。第二次世界大戦の学習になると、私は学校に行きたくありませんでした。自分でいうのもおかしいですが、私は勉強が

できましたし、クラスで常にトップの成績でした。それでも歴史は好きにはなれませんでした。日本の悪いことばかりが語られ始めると、別の一面もあると説明したい気分になりました。けれども、小学生だった私には自信はありませんでした。また、手を挙げて自分から話をする時代でもありません。先生の話が一番正しいのです。試験勉強はしていましたが、私は学校で習う歴史の授業が大嫌いでした。

私は、小学生ながら、年配の人が毎日のように話していた「日本人は悪い」という考え方が、同世代に共有されることを心配していました。「日本人は悪い」と繰り返されると、同世代も同じようにそう思うのではないかと心配したのです。それぐらい当時は言われ続けました。

イネスさんは、先述のマサオさんの子どもと同世代である。1973年にフィリピンで日比友好通商航海条約が批准されるなど、1970年代になってフィリピン側の「反日感情」が沈静化しつつあったと言われることもあるが、70年代は、まだまだ「反日感情」が社会を覆っていたことが窺える。その結果、イネスさんは、祖父が日本人であることを公表できず、学校での歴史教育に戸惑いながら、周りの目を気にして日系人として生きてきたのである。

(3) 日系人として生きる

私たちが住んでいたカリナン地区には、多くの日系人が住んでいます。今でも10人ぐらいの日系人が住んでいます。カリナンの日系人は、80年代になって組織をつくり、集まるようになりました。月に1回、土曜日か日曜日に会合があり、母と一緒に時々出かけました。そこで話されるのは、日本人のいい話ばかりでした。日系人が集まれば、祖父たちのいい話しか聞きませんでした。「日本人は悪い」という近所の人の話とは全く違い、当初は戸惑いました。

私自身が日系人だと言えるようになったのは、高校3年生の時です。「日系人のための毎土曜日の日本語クラス」に通い始めました。同級生が自分のことを日系人と言うようになったのです。母と一緒に、日系人の会合に参加するようになった私も、「日系人なんだね」と言われ、「うん」と言えるようになりました。繰り返すようですが、それまで、祖父は日本人、母は日本人の子どもだと言うことには、何のメリットもなく、笑われるだけだったのです。だから、自分から祖父は日本人とは絶対に言いませんでした。

それでも、私は、おじいさんが悪い人だというのは、絶対に信じませんでした。私の祖母は、再婚してからも、祖父のことを話してくれました。祖父は優しく、

勤勉だったことなど、祖母の口から出る祖父の話には、いいエピソードしかありませんでした。祖母がうそを言っていないと思えるのは、フィリピン人と再婚しても、祖父がいい人だといひ続けたことです。祖父は兵隊ではなく、戦争被害者の一人です。祖父は商売のためにフィリピンに来たのです。私は祖母や母から聞く祖父が大好きでした。今でも、会いたいぐらいです。祖父は戦争のせいで亡くなったのです。私は小さい頃に、日本人の悪口を散々に聞いてきましたが、全ての日本人が悪いとは思っていません。

日系人としての誇りは高校生の時に芽生えたのではありません。私が日本に渡った時です。私は日系3世の一人として、日本に1年間の語学研修の機会を得ました。1990年から1991年までです。私たちに日本語を教えてきた日系2世は歳をとってきたことから、今度は日系3世が教えられるようにと、私はカリナン地区の代表として選ばれました。私は当時、大学生でしたが、大学を休学して、日本に渡りました。私はそれまで、兄弟10人がいる家庭で育ち、ずっと大変な生活をしてきました。日本に行けた時は、つらい生活を抜け出したと思えました。

イネスさんは、80年代に日系人コミュニティや自分自身に変化があったことを語っている。その背景には、日本のダバオ引揚者の活動があるだろう。1968年に「ダバオを愛する会」が結成され、翌年には慰霊墓参訪間が実現し、以後日本人のダバオ訪問が増えた。また、ダバオに進出した日本企業や宗教団体の協力等により、日系人の確認や連携活動が行われるようにもなった。1980年にはフィリピン日系人会が結成され、同じく80年代に日系人会を支援する友好協会も日本で創設されている（木下2013：874-876）。日本の経済発展を追い風に、社会的経済的交流が活発になっていき、その中でイネスさんも日系人であることが表明できるようになった。そして日本への留学を果たす中で、日系人としての誇りが芽生えていったのである⁽⁸⁾。

(4) 私の役割と日本社会への期待

私は子どものころから、日本で生まれ育ち、日本語を母語にする人が日本人だと思っていました。日系人は、日本人の血は引いていますが「mix」です。私には、日本人になりたいという気持ちがあります。そして、日本にルーツがあることを誇りに思っています。フィリピンか日本か、という国籍の選択をしなければいけないことになったら、私が選ぶのは、日本だと思います。もちろん、私はダバオが大好きです。私はダバオにいますので、日本との懸け橋になりたいと思っています。

す。そういうことをすれば、実際に日本に住まなくても、日系人としての役割を果たせます。自分だけがそう思っているのかもしれませんが。

私には二人の子どもがいます。娘は19歳で、現在、東京の大学で学んでいます。息子は15歳で、ダバオに住んでいます。息子は豊橋に行きたいと言っています。そこには、私の兄弟姉妹が住んでいるからです。

私の子どもたちは、日系4世ともいえますが、日系3世のような嫌な思いはしていません。すでに、日系人学校ができましたし、長女は日系人学校で勉強しました。昔と違って、今は日本に懂れている人の方が多いので、環境が全く違います。

私の娘は、将来、日本とフィリピンの友情を強くしたい、外交官になって大使になりたいと語っています。日本とフィリピンの架け橋になりたいとも言っていました。日系人の強みは、「架け橋」になることかもしれませんが。私はここで生まれ育ちました。お世話になっているのはフィリピン、そしてダバオが大好き。そして、日本につながっている人間なのです。

日本の学校には、フィリピンにも日本人が多くいたことを教えてほしいと期待しています。中国に渡った日本人や残留孤児は知られていると思いますが、フィリピンにもいたということ、南米移民だけでなく、フィリピンにも日本人移民がいたことを日本に住む子どもたちに知ってほしいと思います。

イネスさんは戦後四半世紀後にダバオで生まれている。そのイネスさんの子ども世代になると、イネスさんが体験したような「嫌な思い」はなくなったことが述べられている。日系人に対する差別を経験したのは三世の青少年期までと言われることが多いが（木下2013：881）、その背景には、日本の経済発展や日比関係の進展がある。イネスさんも聞き取りの中で、「80年代になると、少しずつ言われなくなってきました。今では、そういう話はほとんど聞きません。80年代頃から、日本の景気もよくなりました。当時、フィリピンから日本に渡った女性が多くいましたが、日本で稼いで、フィリピンで家を建てるようになり、戦争中の日本の悪いところよりも、日本のよさを感じるようになったのだと思います」と述べている。また、イネスさんのいう「日系人学校」の存在も無視できないだろう。1990年代に、日系人らによる本格的な教育機関の創設が始まり、幼稚園、小学校、高校がつくられた。そして、2000年代には大学が創設され、日本理解につながる宣伝や地域貢献が今日まで継続的になされてきた。イネスさんは、現在、その「日系人学校」の校長や大学の学長を務めている。

4. フィリピン残留日本人学習の教材開発

4.1. 三者のライフストーリーを学ぶ意義

ハツエさん、マサオさん、イネスさんの3人のライフストーリーを見てきた。ハツエさんの事例は、その現在の様子から、フィリピン残留日本人への聞き取りが「時間との競争」であることを考えさせるものとなるだろう。

マサオさんとイネスさんの事例からは、親子関係に近い年齢差であっても、世代を超えて、「反日感情」の強い時代を生きてきたことが窺える。残留日本人・日系人が、フィリピン人ゲリラに追われたり、「ハポン、ハポン」とからかわれたりした背景には、フィリピン人の戦争体験がある。フィリピンでは、太平洋戦争の結果、民間人を含めて約110万人もの人々が亡くなっている。「そのなかには、フィリピン人の信頼を失った日本軍による虐殺の犠牲者が多数含まれていた。この戦争中にフィリピンの国土はすっかり荒廃した。そして、なにより日本占領期の負の遺産は、フィリピン人同士が互いに猜疑心をいだいて戦い、戦後の内戦へと引き継がれたこと」だといわれる（早瀬・深見1999）「皇民化教育を受けた当時の日本人は、戦争によってフィリピンが物質的に大きな損害を被っただけでなく、フィリピンの文化や社会を破壊し、人間関係を損ねたことに、戦後も気付くことはなかった」と早瀬（2012：244）は述べているが、フィリピン国内に残留した日本人は、フィリピン人の怒りや恨みに対峙しながら生きざるを得なかったのである。イネスさんが語るように、戦前の日本人への見方は一面的でありながらも、残虐な日本人像は庶民の間で根強く共有された。

ライフストーリーの中では、三者のアイデンティティが語られる。ハツエさんは日本人と、マサオさんは日本人でもありバゴボ族でもあると、イネスさんは日系人であると語っている。三者のアイデンティティは、父（祖父）との関係、教育環境、時代背景、世代などが作用して形成されたものであろう。その意味で、三者のアイデンティティから、家族関係やフィリピン史の一端が見えてくる。

ハツエさんやマサオさんは無国籍の残留日本人ではない。しかし、就籍許可が下りるまでは無国籍状態であった。就籍許可が下りて以降、ハツエさんやマサオさんの子どもは、日本に渡って生活している。イネスさんの兄弟も日本で暮らしている。これらの事例からも分かるように、日本には、フィリピン残留日本人の子孫が暮らしているのである⁽⁹⁾。森茂・中山は、移民学習の意義の一つに、「移民（児童生徒）のアイデンティティを確認する」を挙げている。フィリピン残留日本人のライフストーリーを学ぶことは、日本で暮らす残留日本人の子孫にとっては、自らのアイデンティティを考える機会にもなる。

4.2. 社会科でフィリピン残留日本人のライフストーリーを学ぶ意義

社会科でフィリピン残留日本人学習のライフストーリーを学ぶ意義は三つある。一つは、教科書で学ぶ太平洋戦争観や戦後社会観を問い直すことである。二つは、国籍や無国籍問題について考えることである。三つは、日本とフィリピンとの関係史（とりわけ近現代史）に関心を持たせることである。

一つ目の教科書で学ぶ太平洋戦争観や戦後社会観を問い直すとは、教科書記述を問い直すことでもある。小・中学校の社会科教科書は、基本的に、戦前・戦中は戦争に至る経過と各地の戦争被害を学び、戦後は日本の新国家建設の様子や国民生活の向上、国際社会での日本の役割を学ぶという構図になっている。

フィリピン残留日本人のライフストーリーを学ぶことは何を意味するだろうか。第一に、フィリピンでの戦争体験について考えることである。ダバオでは、収容時の死亡者を含めると、日本人移民の死者数は約8,700人に上り、「半数近くの移民が戦争とその後の収容により命を落とした」（飯島2011：143）のである。小・中学校の学習指導要領解説社会編には、戦争被害に関しては、「国内各地への空襲、沖縄戦、広島・長崎への原子爆弾の投下など、国民が大きな被害を受けたことが分かることである」（小学校、下線筆者）、「我が国が多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大な損害を与えたこと、各地への空襲、沖縄戦、広島・長崎への原子爆弾の投下など、我が国の国民が大きな惨禍を被ったことなどから、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解できるように」（中学校、下線筆者）と記されている。「我が国の国民が大きな惨禍を被った」のは、日本国内だけではない。「日本帝国崩壊に伴う太平洋戦争の地理的・空間的な認識の『空白』」の改善に寄与する一つが、フィリピンでの戦争体験である。

第二に、戦後の「国民生活の向上」と言った時の国民とは誰かという問題を改めて考えることを意味する。つまり、日本の軍事占領から解放されたフィリピンで、戦後日本人であることから苦しい立場に立たされ、また戸籍の回復と日本への帰国を願う人々の存在について考えることである。「国民生活が向上し」たという理解で括ることの難しいような人々の存在と向き合い、改めて「国民」とは誰か、「国民生活の向上」とは誰の暮らしを指しているのかを改めて考えるきっかけにできる。

次に二つ目の、国籍や無国籍問題について考えることについてである。社会科教科書（東京書籍）を見ても、「国民主権」は記述されても、国民を規定する国籍法や無国籍問題について記述されていない。日本の国籍法は、長らく父系血統主義をとっていたが、1985年以降、父母両系血統主義をとるようになった。つまり、1985年以前

は、父親が日本人であればその子は日本国籍を有するが、父親が日本人でなければ、例え母親が日本人であっても、その子は日本国籍を有さないことになっていたのである。フィリピン残留日本人の存在を通して、国籍はどのようにして決められているのか、また無国籍者はどのような問題を抱え、どのような解決策があるのかを考えるきっかけを生み出す。フィリピン残留日本人の存在を通して、二重国籍の是非についても考える機会になるだろう。

最後に三つ目の日本とフィリピンとの関係史やフィリピンに関心をもつことについてである。小・中学校の社会科教科書を見ても、中国や韓国に比べて、フィリピンの情報は少ない。フィリピン残留日本人のライフストーリーをきっかけに、改めて日比関係史やフィリピンに関心をもたせたい。

4.3. フィリピン残留体験を用いた学習のねらい

フィリピン残留日本人のライフストーリーを用いた学習のねらいを考える上で、残留体験の位置づけを二つに分類してみる(表3参照)。一つはフィリピン残留日本人の体験「について」学ぶ学習である。もう一つは、フィリピン残留日本人の体験「を通して」学ぶ学習である。前者の学習は、個々の体験を知り、フィリピンでの戦争や戦後、残留日本人の暮らしについて知るための学習である。後者の学習は、残留者の体験を通して、フィリピン残留の歴史的背景や無国籍問題について考え、フィリピンや日比関係史に関心をもつための学習である。後者の学習は前者の学習が土台となる。なお、両者は明確に区分できるものではなく、学習内容として重なることもあるが、学習のねらいを意識する上での参照としたい。

表3 フィリピン残留日本人学習の分類

体験の位置づけ	学習のねらい
フィリピン残留日本人の体験について学ぶ学習	フィリピンでの戦争や戦後、残留日本人の暮らしについて知る。
フィリピン残留日本人の体験を通して学ぶ学習	フィリピン残留の歴史的背景や無国籍問題について考え、フィリピンや日比関係史に関心をもつ。

4.3. 小单元「フィリピン残留日本人の願い」の授業構想

ここで示す授業構想は、中学校社会科歴史的分野における太平洋戦争後の学習を想定して設定する。

4.3.1. 小单元目標

- フィリピン残留日本人の体験を知り、フィリピン(ダバオ)での戦争と関連づけて考える。
- フィリピン残留日本人の無国籍問題について知り、自分の考えをもつ。

4.3.2. 小单元の構成

单元は2つのパートで構成される(1パート1時間、計2時間である)。1つ目のパート「フィリピン残留」では、フィリピン残留日本人の生活体験やフィリピン人の戦争体験を知る。2つ目のパート「残留日本人と無国籍問題」では、フィリピン残留日本人の無国籍問題の背景について知り、同問題に対して自分の考えがもてるようにする。

4.3.3. 指導計画

	主な学習活動	備考	資
① フィリピン残留	・映画「日本人の忘れもの」の一部を見て話し合う。 ・ハツエさんの今について話し合う	・映画に登場するハツエさんに関心をもたせる。 ・ハツエさんの現状から「時間との競争」について考える。	① ②
	フィリピン残留日本人はどのような体験をしたのだろうか		
② 残留日本人と無国籍問題	・マサオさんやイネスさんのライフストーリーを調べる。 ・二人の共通点を話し合い、残留日本人が戦後生きづらかった理由を考える。	・選択して調べ、分かったことを紹介し合う。 ・ダバオでの戦争中の様子やフィリピン人の戦争体験を紹介する。	③ ④
	・フィリピン残留日本人訪日代表团として来日したイネスさんたちの願いについて話し合う。 ・残留日本人の国籍取得状況を調べる。	・国籍はどのようにして決まり無国籍になるとどのような不利益があるのかを考える。 ・戦後、朝鮮の人々だけでなく、日本人も国籍を失ったことに気付かせる。	
	フィリピン残留日本人の多くはなぜ無国籍になったのだろうか		⑦
	・フィリピン残留日本人の無国籍状況の原因を考え、話し合う。 ・残留日本人の無国籍問題に対してできることを考える。	・中国残留日本人との違いについても考える。 ・無国籍者に対する国際的取り組みについて紹介する。	

資料

- ①DVD「日本人の忘れもの フィリピン残留日本人編 試写用」など
- ②本稿にあるハツエさんの様子とライフストーリー
- ③本稿マサオさんのライフストーリー (1)～(5)
- ④本稿イネスさんのライフストーリー (1)～(4)
- ⑤フィリピン残留日本人訪日代表团からの報告シンポジウムパンフレット(2019年10月31日)など

資料⑥ フィリピン残留日本人の国籍取得状況

外務省第12次調査(2019年3月公表)によると、残留日本人は、計3,810人いるとされる。その内、生存者(生死不明者含む)は1,723人(45%)、死亡者は2,087人(55%)である。生存者(生死不明者含む)1のうち、日本国籍取得済は654人(38%)、無国籍者は1,069人(62%)である。

※PNLSC主催「フィリピン残留日本人訪日代表団からの報告シンポジウム」(2019年10月30日)配布資料、p.4より

資料⑦ フィリピン残留日本人の無国籍状況の原因

太平洋戦争が始まると、日本人移民の多くが軍人・軍属として現地で徴用された。日本人の父とフィリピン人の母をもつ子どもも適齢期になれば徴用された。戦争によって、日本人の父と死別したり、生き別れたりした子どもは、戦後、「反日感情」の激しくなったフィリピン社会で、難を逃れるために山奥に逃げ隠れ、日本名をフィリピン名に変え、日本人の子であることを隠して生きた。

1956年に日本とフィリピンは国交を回復し、1960年に友好通商航海条約が結ばれた。だが、フィリピン側の「反日感情」が強かったため、同条約が批准されたのは1973年のことである。その間もそれ以降も、フィリピン残留日本人の帰国は難しく、出自を隠して生きていたことに加え、戦争中に、書類(戸籍)を紛失したり、戸籍登録がなされていなかったりするなど、出自の確認が非常に困難であった。

戦前のフィリピン憲法(1935年)では、フィリピン人母と外国人父の間に生まれた嫡出子は、成人までに国籍選択をしない場合、父方の国籍を継承するとされた。戦後のフィリピン憲法(1973年)では、フィリピン国籍も選択できる権利が制定されたが、極度の貧困にあり、情報を得るのに難しい環境にあった残留日本人は、選択して国籍を取得することもできず、日本人でもなく、フィリピン人でもない立場に置かれた。

5. おわりに

本研究は、フィリピン残留日本人のライフヒストリーを記述し、フィリピン残留日本人理解のための教材開発を行った。本研究の意義は三つある。第一に、残留日本人の現状を捉えつつ、世代の異なる残留日本人のライフヒストリーを記述したことである。ハツエさん、マサオさん、イネスさんの三者の生活体験から、フィリピン社会の変遷や日比関係の変化、アイデンティティのあり様などを見出すことができた。第二に、フィリピン残留日

本人のライフヒストリーを学ぶ意義やねらいを整理したことである。第三に、フィリピン残留日本人理解のための授業を具体的に示したことである。

本研究の課題は二つある。第一に、ライフヒストリーの調査対象者の層を幅広くすることである。ダバオ以外の居住地、残留日本人本人からその孫やひ孫に至る世代、様々な社会階層、無国籍者か否か、など多様な指標に基づいて調査することである。現在、フィリピン国籍をもたず、就籍許可も下りていない無国籍者は1,000人を超えているが、そのような人々のライフヒストリーを記述することは特に重要である。第二に、実践のフィルターを通して、フィリピン残留日本人学習の授業構想を検証し、学校現場での教育実践に寄与することである。

謝辞

本論の執筆にあたり、アカボシハツエさん、カトウマサオさん、イネス・山之内・P・マリヤリさんには、インタビューのご協力を頂きました。また、PNLSCの猪俣典弘さん、石井恭子さん、フィリピン日系人会ダバオのイネスさん(同上)、エスコビリャ・アントニナ大下さんを始めとする皆様に様々な面でのご協力を頂きました。改めて感謝の意を表します。尚、本研究はJSPS 科研費(18K13169)の助成を受けたものです。

註

- (1) PNLSC主催「フィリピン残留日本人訪日代表団からの報告シンポジウム」, 2019年10月30日配布資料, p.4
- (2) PNLSC主催, 2019年10月30日同配布資料, p.4
- (3) 戦後50年目にあたる1995年以降、「フィリピン残留孤児」あるいは「フィリピン残留日本人」を名乗って日本への集団帰国や関係省庁への陳情を繰り返して、自分たちの身元や日本国籍確認のための調査などを求める活動が続いた(大野2008:743)。
- (4) 日本の学校に通う児童・生徒がフィリピン残留日本人に聞き取りをすることは難しいことから、本研究では、残留日本人のライフヒストリーに着目する。なお、谷(1996)の整理では、ライフヒストリーとは「個人の一生の記録、あるいは、個人の生活の過去から現在に至る記録のこと」であり、オーラルヒストリーは、「調査者の質問に答える対話形式で調査対象者の生まれてから今日までの歴史を語ってもらうもの」である。オーラルヒストリーを録音し、文字化し、編集を施したものが、ライフヒストリーとされる。ライフヒストリーは、描かれる人生が時系列的に編成され「誰もが了解できる内容を含んでいるという意味で、一定の客観性をもつ」(桜井2012:11)。
- (5) ここでの記録は、蘭(2013:164)のいう、聞き書きに近い。つまり、「聞き取った内容を整理し、その人の生い立ちから現在までの歴史の経過にもとづき順を追ってトピックごとに整理編集しながらも、出来るだけ聞き取りに忠実に個人のライフヒストリーを再現する」方法である。その意味ではライフストーリーに近いともいえる(桜井2012)。
- (6) ハツエさんの娘については、実名公開の許可を得ていな

いので、本論では娘とだけ記しておく。

- (7) 2019年11月24日、ミンダナオ国際大学学長室での聞き取り。
- (8) 飯島・大野(2010)によると、戦前期にダバオに形成された日本人町は墓地を除けば痕跡はほとんどなく、フィリピン日系人にとっての渡日とは、「想像上の祖国」を体験し、自らのルーツを確認する機会であると述べる。その意味で、イネスさんの留学体験は、イネスさんのアイデンティティに大きな影響を与えたものと思われる。
- (9) 日本には、日本人とフィリピン人との間にできた、日系フィリピン人が暮らしており、「旧日系人」と「新日系人」に分けられるという。「旧日系人」は、残留日本人やその子孫であり、「新日系人」は、1945年以降(論者によっては1980年代以降)に生まれた日系フィリピン人とされる。なお、日本に住む「旧日系人」は第二次産業が、「新日系人」は第三次産業が主たる就労先という(高畑2013:963-964)。

引用・参考文献

- 蘭信三(2013)「満州引揚者のライフストーリー研究の可能性—歴史実践としての『下伊那のなかの満州』」, 福間良明他編『戦争社会学の構想—制度・体験・メディア』勉誠出版, pp.139-171
- 飯島真理子(2011)「フィリピン日本人移民の戦争体験と引揚げ—沖縄出身者を中心に」, 蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動—引揚げ, 送還, そして残留』勉誠出版, pp.136-149
- 飯島真理子(2013)「フィリピン引揚者の『ダバオ体験』—移民・戦争の記憶の沈黙と共有」, 蘭信三編『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯店』勉誠出版, pp.691-730
- 太田満(2019a)「サハリン残留・帰国者学習の教材開発—国際理解教育の観点から」『共栄大学研究論集』第17号, pp.69-84
- 太田満(2019b)『中国・サハリン残留日本人の歴史と体験—北東アジアの過去と現在を次世代に伝えるために』明石書店
- 大津和子編(2014)『日韓中をつくる国際理解教育—日本国際理解教育学会・ユネスコアジア太平洋文化センター(ACCU)共同企画』明石書店
- 大野俊(1991)『ハボン—フィリピン日系人の長い戦後』第三書館
- 大野俊(2008)『『ダバオ国』の日本帝国編入と邦人移民社会の変容』蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版, pp.721-752
- 大野俊(2016)『『日系人』から『残留日本人』への転換—フィリピン日系二世の戦後問題と就籍運動を中心に—』日本移民学会編『移民研究年報』22号, pp.23-42
- 河合弘之編(2005)『フィリピン日系人の法的・社会的地位向上に向けた政策のあり方に関する研究』東京財団研究推進部
- 木下昭(2013)「日本語教育のトランスナショナル化—ダバオ日系社会の変遷と植民地主義」蘭信三編, 勉誠出版, 前掲書, pp.867-906
- 桜井厚(2012)『ライフストーリー論』弘文堂
- 高畑幸(2013)「日本人移民の子孫と国際婚外子—フィリピンから『帰還』する新旧日系人」蘭信三編, 勉誠出版, 前掲書, pp.935-968
- 谷富夫(1996)「ライフ・ヒストリーとは何か」谷富夫編『ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, pp.3-28
- 陳天璽(2010)『忘れられた人々—日本の「無国籍」者』明石書店
- 寺見元恵(2001)「日常時の中の戦い—フィリピンにおける文化戦線」倉沢愛子編『東南アジア史のなかの日本占領』早稲田大学出版部, pp.259-292
- 早瀬晋三・深見純生(1999)「近代植民地の展開と日本の占領」池瑞雪浦編『東南アジア史II 島嶼部』
- 早瀬晋三(2012)『フィリピン近現代史のなかの日本人—植民地社会の形成と移民・商品』東京大学出版会
- 早瀬晋三(2018)「東南アジアへの移民—日本優位から対等な関係へ」日本移民学会編『日本人と海外移住—住民の歴史・現状・展望』明石書店, pp.199-215
- 藤井大亮(2018)「オーラルヒストリーが育む歴史的な見方・考え方」井田仁康監修・編著『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』帝国書院, pp.174-183
- 森茂岳雄・中山京子(2008)『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ』明石書店
- 森茂岳雄・中山京子(2011)「移民学習論—多文化共生の実践にむけて—」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶ノ水書房, pp.307-319
- 森茂岳雄・中山京子(2014)「3.0大単元『人の移動』の概要」大津和子編, 明石書店, 前掲書, pp.60-69